

東日本大震災復興支援活動と地域再生

——岩手県大槌町吉里吉里地区を事例として——

浅 川 達 人

1 本稿の目的

(1) 活動記録とその考察

2011年3月11日以降、私の生活と研究スタイルは大きく変わった。東日本大震災というこれまで経験したことのない大きな災害に遭遇し、その後の日々を、明治学院大学ボランティアセンター長補佐という立場で過ごさなければならなかったからである。ボランティアセンター長補佐という立場でなかったならば、生活も研究スタイルも、あるいは変わらなかったかもしれない。

次章以降に活動記録を詳述するが、あの日以来、月に1回程度しか休めない日々を現在（11月）まで送り続けている。月に最低1回は、被災地に復興支援活動に出かけていること、活動を通して考えたこと学んだことなどを発表させていただく場が多いことなどが、多忙の要因のひとつとなっている。

この経験を、私の専門である社会学、なかでも都市社会学の言葉で語るとは、現在の私には難しい。ボランティアセンター長補佐という立場で復興支援活動を積み重ねてきたものの、都市社会学者という立場でその活動の意味を考察するという社会学的学究は、最近ようやく少しずつ始めることができるようになったばかりだからである。したがって本論文では、明治学院大学ボランティアセンター長補佐である私が、東日本大震災発生より今日まで、何を根拠に、

どのように判断して、どのような活動を行ってきたのかを、一人称を主語として記録することを第1の目的としたい。そのうえで、都市社会学者としてこの活動記録を分析し、考察を加えることとを第2の目的としたい。

(2) 明治学院大学ボランティアセンターの紹介

明治学院大学ボランティアセンターは、1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、大学内の独立した組織として全国に先駆けて誕生した。1998年には横浜キャンパスに、2001年には白金キャンパスに「ボランティアセンター」が開設された。スタッフは、専門職である2名のボランティアコーディネーター、教員から選出されたセンター長およびセンター長補佐、そして2名の専従の事務職員から構成される教職員スタッフ⁽¹⁾と、学生スタッフによって構成されている。

本ボランティアセンターは、「サービス・ラーニング・プログラムの強化」「学生の自主的活動の応援」「地域社会との協働によるボランティアの推進」「ボランティアに関する情報の提供」「学生スタッフをパートナーとする活動」を活動指針としてこれまで活動してきた。本年は従来の活動に、東日本大震災被災地復興支援活動が新たに加えられることとなった。次章ではその活動記録を、ボランティアセンター長補佐の視点を通してまとめることとする。

2 活動記録

(1) 募金活動からスタート

2011年3月14日。地震による大きな揺れによって書架から脱落した書籍や書類を整理するために、私は朝から研究室にて作業をしていた。そこへ、2011年3月に卒業を控えた社会学部の学生が現れ、学内で募金活動を行いたいという申し出を受けた。翌日(3/15)ボランティアセンターにて、有志学生数名とボランティアセンタースタッフとが協議し、学内での募金活動の準備に着手す

ることを決めた。

3月17日から19日まで、卒業式は中止となったものの、いろいろな事情で学内に集まった学生を対象として、募金活動を行った。ここで集まった募金は、有志学生からボランティアセンターにその活用が託された。これが、被災地復興支援活動のための原資の一部となったのである⁽²⁾。

(2) 先遣隊による計画立案

募金活動終了直後からボランティアセンターでは連日会議が開かれ、現地までの交通事情、ガソリンの供給体制、余震の状態、原発事故の影響を考慮しながら、先遣隊派遣の準備が進められた。4月4日、ボランティアセンター長と学生4名が仙台へと向かい、日本ユニセフ協会との協働プログラムをスタートさせた。そして、4月8日から10日まで、私と2名のボランティアコーディネーター、1名の事務職員という4名のチームが、先遣隊として、東北学院大学のボランティアステーション⁽³⁾を訪問するとともに、岩手県の被災地を視察することとなった。

出発当日の朝(4/8)、4月7日夜に起きた大きな余震のために、東北学院大学土樋キャンパスは閉鎖となったという情報を知らされた。しかしながら、行けるところまで行ってみようと、レンタカーに乗って大学を後にした。その日の午後に、一部の建物の安全確保を終えた東北学院大学土樋キャンパスを訪問し、この震災を機に立ち上がったばかりのボランティアステーションを見学させていただき、今後の協働プログラムの可能性について議論させていただいた。

翌日(4/9)、その日の朝に下りだけ開通した東北道を北上し盛岡インターチェンジまで到達。そこから現地のドライバーに運転を代行してもらいながら、宮古市、山田町、大槌町、釜石市と被災地を視察した。当時の被災地の様子は、次ページの写真に示した通り、瓦礫の山であった。



左上：宮古市，右上：山田町，左下：大槌町吉里吉里，
右下：釜石市。いずれも2011年4月9日筆者撮影。

これらの写真が示す通り，被災地は果てしない量の瓦礫に覆われているように見えた。この瓦礫の撤去作業は重機を使わなければ到底できるものではなく，大学生ボランティアがその作業を担うことはとても難しく，我々が担うことができる活動はあるのだろうかと思方する思いであった。

4月9日夕方，岩手県立大学学生ボランティアセンター⁽⁴⁾を訪れ，今後の協働プログラムの可能性について議論させていただいた。このとき，岩手県立大学のボランティアセンターを訪問していたユニセフ職員の方から，教育に関連する活動であればユニセフがバスを手配可能であるという話をいただいた。また，本学ボランティアコーディネーターが大槌町教育委員会に連絡を入れたところ，大槌町内にあった7つの小中学校のうち被災しなかったのは2校

のみであり、4月下旬にはこの2校の校舎を利用して、学校を再開させたいと考えていることがわかった。この2校とは、吉里吉里小学校と吉里吉里中学校であり、この後、明治学院大学の復興支援活動の拠点となった。

大学生が行う被災地復興支援活動は、無理をして瓦礫撤去や泥かきに従事するより、学校再開支援活動を行う方がふさわしいのではないかと。4名の先遣隊はそのように判断し、4月10日東京に向かう移動中に、先遣隊の報告書をまとめ、学校再開支援活動を立案した。4月11日、大学執行部が集まる会議において、「日本ユニセフ協会との協働プログラム」「東北学院大学との協働プログラム」、学校再開支援活動から着手する「岩手県立大学との協働プログラム」をスタートさせることが決定した。こうして、岩手県大槌町吉里吉里地区での復興支援活動は、学校再開支援活動を端緒として動き始めたのである。

(3) 学校再開支援活動

4月12日、ポートヘボンという学生用ポータルサイトを通じて、我々が企画した被災地復興支援活動に参加する学生の募集を開始し、4月16日に参加を希望する学生を集めてオリエンテーションを開催した。先遣隊が撮りためた現地の映像を見せながら、活動にあたっての心得について説明し、チームビルディングと役割分担を行い、午後には社会福祉学科教員が主催した傾聴講座にも出席するよう、参加予定学生に求めた。

学内での事前準備の後、4月19日から5月2日まで、約5日間を1タームとして、3タームの学生（計32名）を岩手県大槌町吉里吉里へと派遣した。私とボランティアコーディネーターが引率にあたった。主な活動内容は、「吉里吉里地区の学校再開支援活動」「保育園にての支援物資仕分け、園児とのふれあい」「写真修復作業」であった。

このうち、学校再開支援活動の意義と実践についてのみ、ここでは述べておきたい。前述した通り、大槌町にあった7つの小中学校のうち、被災を免れた

のは吉里吉里中学校と吉里吉里小学校だけであった。この2校に、他の小中学校の生徒が教室を借りる形で通い、教育活動を再開するという計画を教育委員会から教えていただき、また、地元紙である岩手日報からもその計画について知ることができた。

学校再開支援活動には、2つの効果が期待された。少子高齢化が進行し、深刻な人口減少により地域の社会的機能がマヒするおそれを目の前にしている農山漁村において、小中学校は必要不可欠な機関である。地域の運動会やお祭りなどの親睦機能・社会的統合機能の一翼を担い、パソコンやプロジェクターなどの情報機器の共有に寄与し、教職員とその子どもたちという住民を供給してくれるのが、小中学校なのである。農山漁村において、住民は小中学校の存続を熱望する。学校再開支援活動とは、そのような地域住民の熱い思いを支援するという効果が期待された。

それだけではない。学校再開支援活動は、学校再開に奔走する教職員の方々の「レスパイトケア」に繋がることが期待されたのである。レスパイトケアとは、障害者、高齢者などをケアしている家族を癒すため、一時的にケアを代替して、リフレッシュを図ってもらう家族支援サービスをさす。学校再開にむけて奔走する教職員が行わなければならない仕事は多岐にわたり、大量にある。そのうち、専門職である教職員が行わなければならない仕事と、専門職ではなくても行うことができるにもかかわらず、人手が足りないために専門職が行っている仕事がある。被災地は、後者のために教職員が疲弊し、教育に向き合う時間が取れないという事態が生じかねない状況であった。そのような「誰かがやらなければならない、誰にでもできる仕事」を、学生ボランティアが一時的に代替することによって、教職員には本来専門職として行わなければならない仕事に専念してもらう。これが、我々が企画した学校再開支援活動である。これは専門職に向けた「レスパイトケア」のひとつとみなすことができるだろう。



したがって、学生ボランティアが行った実際の活動は、教室の清掃、教材の整理、支援物資の整理などであった。上の写真は、吉里吉里小学校にて教室の床面に貼られたテープを剥がす活動の様子である。吉里吉里小学校は、4月は避難所として使われていた。その際、何かの印としてつけられたテープが、教室の床に残っていた。ひとりの先生が、避難所にいた若者たちと、すでに1時間程度、この作業に時間を費やしていた。なかなか剥がれないテープ。他にもやらなければならない仕事があるという状況の中で、その先生には焦燥感と絶望感が漂っていた。その作業を学生ボランティアが代替したのである。学生が作業に取り組んでいる間に懸案だった他の仕事を片付けた先生は、テープを剥がし終えた床を見て、涙ぐんで喜んでくれた。

(4) 支援の継続と中長期的支援の枠組みづくり

5月21日から22日まで、私とボランティアコーディネーター、学生3名にて吉里吉里を訪れ、活動を行った。この時の活動の目的は、支援活動を継続するという意志と姿勢を吉里吉里の方々に伝えること、そして中長期的支援を実現するために必要な枠組みを作ることにあつた。

5月の連休中、被災地の多くは、全国各地から訪れるボランティアで溢れていた。しかしながら連休後は、被災地で活動するボランティアが急速に少なく

なっていた。このボランティアの減少は容易に想像できていたため、我々は5月後半に、たとえ参加してくれる学生が少なかったとしても、吉里吉里を訪れ支援活動を継続するという約束を守り抜く意志があることを、姿勢をもって示す必要があると考えていたのである。そのうえで、吉里吉里地区でのキーパーソンとの信頼関係を構築しつつ、中長期的支援活動の計画を立案することが5月の活動の目的となったのである。

4月の活動から、活動の場を提供していただいたT乳幼児保育園の副園長先生であるH先生の手を煩わせていた保育園に届いた支援物資の仕分け作業を、学生とともにお手伝いした。これも、H先生のレスパイトケアに繋がることを期待しての活動であった。また、4月の学校再開とともに、「古中」と呼ばれる旧吉里吉里中学校体育館に移転した吉里吉里地区の避難所の運営スタッフのおひとりであったSさんと初めてお会いしたのも、この時であった。

中長期的な支援活動を実現するためには、支援活動を参加学生が自ら考え、立案し、実行に移すことができるような体制作りが必要であると考えていた。私やボランティアコーディネーターなどの教職員が発案しなくても、学生自身が自ら考え、動けるようになる。そうすれば、たとえ教職員が引率しなくても、活動を継続することができるからである。6月以降の活動の企画は、この考えに基づいて、学生が主体になり、教職員はそのサポートをするという体制になっていった。

具体的な支援活動として、何を行うか。学生たちが学生たちにできる活動を議論している間に、私とボランティアコーディネーターは、被災地における雇用の創出について議論していた。たとえば、吉里吉里地区で暮らす被災者に現地コーディネーターとなっていただき、現地の状況を我々に知らせてくれること、そして現地で活動する学生たちをサポートすることなどを、仕事として依頼することはできないか。その対価として、いくばくかの賃金を支払うことはできないか。このような計画を踏まえて、学外の助成金を申請し計画実現の可

能性を探ることとした⁽⁵⁾。

(5) 学生主体の活動を開始

6月の活動は、18日から20日の日程で、私とボランティアコーディネーター、学生10名とで行った。学生が企画した、足浴会、買い物支援ツアー、わんぱく子ども広場（子ども遊び）、写真修復作業、お茶っこサロン運営補助などが、その主な活動内容であった。

足浴会は吉里吉里の高台にある高齢者施設にて行った。先に述べた意味での「レスパイトケア」を施設職員に対して行うことを目指した活動であった。

わんぱく子ども広場という活動の目的も、「レスパイトケア」であった。当時、子どもをもつ被災者は、津波で流された家族の搜索や、自分自身の仕事を探すことなどで多忙を極めていた。そのため、子どもたちと関わる時間が相対的に不足し子どもたちにストレスが溜まり、子どもたちにストレスが溜まっているという状況を見て、親たちにストレスが溜まるという悪循環にいた。そこで、学生ボランティアが遊び場を提供することによって忙しい親たちから子どもたちを一時的に離し、預かり、子どものストレス解消とともに、親にリフレッシュする余裕を与えることを試みたのである。

当時我々は、宿泊施設を新花巻においていた。新花巻から吉里吉里まで、借り上げたバスで片道2時間半。朝7時半に宿を出ても、吉里吉里に到着するのは10時。15時半まで活動を行い、16時に吉里吉里を出発しても、宿に到着するのは18時半。移動の5時間は、ミーティングに充当し、活動共有などに有効に利用した。一方、我々が活動している10時から15時半までの間、借り上げたバスはずっと吉里吉里の駐車場に停められていたのである。このバスを有効利用するために考え出されたのが、買い物支援ツアーであった。被災した住民の方とともに学生がバスに乗車し釜石まででかけ、そこで買い物を楽しんでいただくという活動である。被災後初めて買い物を楽しんだという声もいただき、好

評であった。

7月の活動は、9日から10日の日程で、私とボランティアコーディネーター、学生10名とで行った。主な活動内容は、大槌中学校での支援物資配布援助、買い物支援ツアー、夏物衣料配布であり、6月同様、学生が主体になって計画した活動であった。

(6) 夏季休暇中の活動

夏季休暇中の活動は、学生のべ36名、私とボランティアコーディネーターを含む教職員のべ10名が参加して行われた。夏季休暇中の活動から、4つ活動が新たに開始された。「復活の薪プロジェクト」「『吉里吉里語辞典』アーカイブ化活動」「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」「中学生に対する学習支援活動」である。学習支援活動を除く3種の活動について、以下で概説する。

1) 復活の薪プロジェクト

5月中旬より、前述した「古中」にあった吉里吉里地区避難所を利用していた被災者の有志によって「吉里吉里国」という団体⁽⁶⁾が設立された。この避難所には、岩手県の災害支援により薪ボイラーを使った入浴施設が開設され、避難所に身を寄せる方々に利用していただいていた。このボイラー用の薪は、吉里吉里の街を覆っていた、瓦礫と化した住民の家の建材から作り出されていた。建材であった木材を引き抜き、丁寧に釘等を抜いて、チェーンソーで適当な大きさに切断し、斧で割ることにより薪を作っていたのである。

「この薪を売りに出したらどうか」という、薪を作る活動を手伝っていたボランティアの方の発言から、「復活の薪プロジェクト」が生まれた。丁寧に釘抜きを施した木材を約30cmに切断し、斧で割って薪を作り、10kgを一袋とし、一袋を500円（送料をのぞく）で販売する。売り上げの8割はこの作業を担った被災者の収入に充て、残り2割を「吉里吉里国」の活動資金に充てる。これ

が「復活の薪プロジェクト」であった。被災者自身が雇用を生み出し、復興のために歩み始めたのである。

このプロジェクトは次第に全国に知れ渡ることとなり、夏季休暇の頃はちょうど注文が殺到し、被災者のみでは注文をさばききることができなくなっており、ボランティアを必要としていた。本学の学生ボランティアも、この活動に参加することとなった。

9月23日をもって、この「復活の薪プロジェクト」は、薪の注文受付を終了した。住民の家などの瓦礫は、ほぼ片付いたからである。それ以降、このプロジェクトは、予定通り第2幕を迎えることとなった。

このプロジェクトの代表者であるMさんに初めてお目にかかったのは、5月の活動時であった。その時から、「瓦礫は秋頃には片付け終わるだろう。瓦礫が片付いたら、我々は山に入ろうと思っている。山を手入れすれば、きれいな海がよみがえる。きれいな海がよみがえることによって、吉里吉里は復活する。」とMさんは語ってくれていた。その言葉通り、林を手入れするために里山に入ったのである。吉里吉里の里山は私有林が主である。Mさんの親の世代は、里山に入って植林し、漁業の合間に手入れをして木を育て、子どもが大人になった頃、その木で自宅を建築する、というような山の利用が一般的であったという。現代の住民はそれを忘れ、里山の手入れを怠ってしまったため、林は荒れ放題となってしまった。津波がそのことを、思い出させてくれた。Mさんはそう語り、里山の手入れに入っている。後述する10月、11月の活動は、この復活の薪プロジェクト第2幕に参加させていただいた。

2) 『吉里吉里語辞典』アーカイブ化活動

5月の活動中に知り合ったSさんから、6月にメールをいただくこととなった。Sさんの父親が著した『吉里吉里語辞典』という辞典の電子データ化の依頼であった。

『吉里吉里語辞典』とは吉里吉里地区で使われてきた「吉里吉里語」という方言を標準語で説明した辞典として執筆され、2007年に出版された。ところが、東日本大震災の大津波によって、そのほとんどが流されてしまった。2011年6月、津波で流されたアルバムなどを救済するボランティア活動をしていた本学学生が、津波で流された1冊の『吉里吉里語辞典』を発見してくれた。Sさんの許可を得て、それを私が東京に持ち帰り、1ページずつしわを伸ばしてスキャンし、全511ページの画像データを作成した。この画像データを見ながら、一語一語手作業で入力し電子データ化する「電子データ化プロジェクト」を、6月26日に開始した。

学内外からボランティアを募り、ひとりあたりおおむね2ページずつ、入力を依頼した。134名がボランティアとして活動に参加し、2011年11月20日に、全ページの電子データ化作業が完了した。多くの方が『吉里吉里語辞典』に興味を持ってくれたこと、そして、たとえ吉里吉里まで行かなくても吉里吉里の復興を支えることができることを知ってもらえたこと。この二つが、電子データ化プロジェクトを後押ししてくれたのだと考えられる。2011年11月現在、入力済みのデータをプリントアウトし、著者に校正作業を依頼している。そして、校正済みの原稿に基づいて、電子データを修正し、紙媒体での出版を計画している。

さらに、2011年9月より、入力済みのファイルをプリントアウトして吉里吉里に持参し、住民の方々に「吉里吉里語」を実際に話していただき、それをICレコーダーやビデオカメラを用いて、録音・録画するという作業を開始した。この音声データ化作業によって、吉里吉里語のイントネーションや発音を記録することができるようになった。ただし、音声データ化作業は、発音してくださる方の負担も大きいため、収録されているすべての項目について行うことは困難と判断し、その一部を収録するよう努めている。

音声データ化作業を進めていくうちに、吉里吉里語のひとつひとつにまつわ

るたくさんの思い出を、吉里吉里のみなさまからお話しいただくことができた。語っていただいた思い出は、そのままにしておいては、忘れられていくばかりである。

そこで我々は、語っていただいた思い出を録音するだけでなく、文字に起こし、思い出を記録として保存するアーカイブ化活動を開始した。協力してくださる吉里吉里のみなさんに、一人あたり10ページに2・3の吉里吉里語を選んでいただき、発音していただいた上で（つまり、音声データ化作業をした上で）、その吉里吉里語にまつわる思い出を語っていただくこととした。この作業を、夏季休暇中の活動から開始した⁽⁷⁾。

3) 吉里吉里の歴史アーカイブ化活動

中長期的な支援活動の枠組みを整備し始めた5月の活動時より構築を模索してきた、被災した住民の方々との信頼関係。少しずつできあがってきた信頼関係に基づいて、被災前の生活、被災時の状況、被災後の生活について、さまざまな話を聞くことができた。このような記憶は、時間とともに忘却される。忘却することによって辛さを乗り越えるという側面もあるため、忘却することを妨げることは、我々にはできない。

しかしながら、記憶は記録することによって、永く受け継いでゆくことができるようになる。話をうかがうことのできた方々のうち、許可が得られた方のお話を文字に起こすのが、この活動の骨子である。本論に登場した、H先生、Sさん、Mさんなど多くの方の記憶が、現在、学生ボランティアの手によって、記録に置き換わっている。

こうして集められた記録を小冊子にまとめ、吉里吉里地区の中学生などに、副読本として手に取って読んでいただけるように、大槌町役場および教育委員会と協議しながら、計画を進めている。

(7) 秋学期の活動

10月8日から9日、11月4日から6日、私と学生（10月は9名、11月は5名）が吉里吉里地区で活動を行った。主な活動内容は、夏季休暇から新たに始まった4種の活動（「復活の薪プロジェクト」「『吉里吉里語辞典』アーカイブ化活動」「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」「中学生に対する学習支援活動」）と仮設住宅での生活支援活動などである。本稿を執筆している現在、11月26日から27日にも活動が予定されている。

3 考察

(1) 対口支援

明治学院大学ボランティアセンターが行ってきた大槌町吉里吉里復興支援活動は、対口支援活動であると、捉えることができる。「対口」とは中国語でペアを組むという意味であり、中国における四川大地震のときに大きな役割を果たしたために、「対口支援」という用語が人々に知られるようになった。明治学院大学ボランティアセンターと大槌町吉里吉里がペアを組むことにより、大槌町吉里吉里の復興を支援するという同センターの活動は、対口支援そのものである。

同センターが対口支援活動を早期から円滑に開始できた要因を分析すると、以下の4点を挙げることができる。①寄付を原資とした独自財源を確保したこと、②学校再開支援活動という地域住民の思いに沿った活動から開始できたこと、③特定の個人が毎月最低1回は必ず現地に足を運び、個々の住民とのパーソナルな信頼関係を構築する努力を欠かさなかったこと、④支援活動を学生自らが立案し実行できる組織作りをしたこと、である。対口支援活動を展開することとなった大槌町吉里吉里地区と明治学院大学との間に、震災前から縁やゆ

かりがあったわけではない。対口支援活動を開始するためには、初対面の相手と信頼関係を構築することこそが、必要不可欠なのである。そのことを、活動当初から極めて明確に意識できていたことが、円滑に活動できた大きな要因であったと考えられる。

(2) 二元復興

夏季休暇中の活動から開始した「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」は、復興過程を記録する活動である。震災時の体験を聞かせていただくことは、傾聴ボランティア活動であり被災者の心のケアに繋がっている。同時に、これらの活動を通して得られた記録は、現在進行中の復興過程（事後復興）をモニタリングする際の資料になると同時に、事前復興にも役立てることができる。

事前復興とは、災害が発生した際のことを事前に想定し、被害を最小限にとどめるための都市計画やまちづくりを推進することであり、中林一樹（1999）らが提案している概念である。将来発生することが予想されている地震や津波などの被害に備えて、どのような都市計画やまちづくりを行えばよいか、それを検討する際、「吉里吉里の歴史アーカイブ化活動」から得られた記録は、貴重な資料となる⁽⁸⁾。したがって、これらの記録は、事後復興と事前復興の二元復興のための、貴重な資料となると考えられる。

(3) 社会科学的貢献

このように、明治学院大学ボランティアセンターが行ってきた復興支援活動は、対口支援活動であり、二元復興のための資料を作成するのに必要な社会調査活動でもあったと捉えることができる。津波被害の被災地復興支援活動においては、堤防の高さをどの程度にするか、住宅地の嵩上げをどうするか、といった工学系の課題の多さが指摘され、社会科学が貢献できる領域は少ないかのように捉えられている。一般の方もそう捉えているし、社会学者たちもまた、そ

のように考えている。しかしながら、社会科学にも貢献できる分野はある。そのことを、明治学院大学ボランティアセンターの復興支援活動は示している。

注

- (1) 2011年11月現在、兼務の事務職員1名が就任し、派遣社員2名とボランティアコーディネーター補佐2名が、活動をサポートしてくれるようになった。
- (2) その後、本学卒業生がつくる団体である校友会など多くの団体や個人から、多額の寄付をいただくこととなった。
- (3) 東北学院大学ボランティアステーションは、2011年3月29日にスタートしたばかりであった。本学ボランティアセンターの資料などをお渡しし、活動について説明させていただいたうえで、協働プログラムとして何ができるかについて、議論させていた。
- (4) 岩手県立大学学生ボランティアセンターは、社会福祉学部の山本克彦先生の指導とサポートを受けながら、積極的に活動を開始していた。
- (5) 助成金の申請は許可されたものの、残念ながら現地コーディネーターへ支払う謝礼については許可が下りなかった。
- (6) 2011年11月現在、NPO法人申請中である。
- (7) この活動には、のべ50人に対する聞き取り作業が必要となる。1日に可能な聞き取り作業は2件程度であるため、のべ25日間の聞き取り作業が必要である。したがって、このアーカイブ化作業には、1年間程度かかる予定である。
- (8) 記録を「資料」として保管し閲覧に供するだけでなく、防災教育のツールとして積極的に利用する試みも、現在なされている。詳しくは、矢守克也ほか（2005）を参照されたい。

参考文献

- 辻竜平『中越地震被災地研究からの提言』ハーベスト社、2011年
- 中林一樹「都市の地震災害に対する事前復興計画の考察」『総合都市研究』第68号、pp.141-164、1999年
- 山下祐介『リスク・コミュニティ論』弘文堂、2008年
- 矢守克也、古川肇子、網代剛『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション——クロスロードへの招待』ナカニシヤ出版、2005年

付記

私たちに活動の場を与えてくださった吉里吉里のみなさまに、厚く御礼申し上げます。
また、活動に参加してくださった多くの学生ボランティアのみなさま、そして我々の活動を支えてくださった教職員の方のみなさまにも、厚く御礼申し上げます。